（様式１）　　**大学院教員派遣研修報告書**

所　属　校	新宿区立江戸川小学校	氏　名	**小澤　惠智子**
派遣大学院	鳴門教育大学大学院	専攻・コース	学校教育専攻総合学習開発コース
研究テーマ	「いのち」の学習の構想と展開 ―小学校高学年の場合―		

Ⅰ　研究の概要

はじめに

1950年代後半に始まり1970年代半ばに終息する高度経済成長は、日本社会のありようを急速に変化させていった。農業を中心とする社会から高度情報化社会へと社会構造は大きな転換を遂げ、そのめまぐるしい変動の波はいっきに子どもの世界にも浸透する。子どもの生活習慣は大きく変化し、人や自然、事物とのかかわりの場は急激に解体していくことになり、自然や他者とのかかわりの中で教えられ、学び合い、伝えていくという営みは影を潜めてしまったと言える。ここ数年子どもの不登校、むかつき、学級崩壊、キレる子どもといった問題が浮上し子どもが関係する衝撃的な事件が次々と生起し、新聞やテレビには毎日のように「いのち」にかかわる出来事が報道されている。なかでも、子どもに関係する事件が非常に多いことに驚かされる。事件が起こるたびに大人たちは、関心の的を原因追及や未然の防止対策に向け、その対応に追われている。このようなことが今まで何度も繰り返されてきているのである。低年齢の児童、生徒が他者の「いのち」を奪うという衝撃的な行動や自殺といった自らの「いのち」を軽んずる衝動的な行動は子どもの死の意識や生の意識をいびつにさせている現れと言える。

現代の子どもは、社会の歪みの中で「いのち」のつながりの実感や家庭、地域社会のぬくもりを失い､自らの存在をも肯定的に受け止めることができなくなったという現実に生きている。こうした現実に生きる子どもたちにとって生きることの意味や自分の存在について考える機会を必要とされる。すなわち、自らに向き合い自らのよさや可能性を自覚し、生きがいを学ぶ「いのち」の学習の場が求められていると言える。

「いのち」に関する問いを考えることは「いのち」のつながりを実感し、思いやりの心を育む価値ある学びと言える。こうした「いのち」の学習の必要性と意義について再考することは極めて重要であり必要とされる。そこで、これまでも学校教育の根底においてきた「いのち」の問題を直視しながら現代の子どもの「生と死」の意識や認識を探り、求められる「いのち」の学習の具体的な取り組みについて構想し、「生と死」を身近にとらえ共に学び合う「いのち」の学習の授業を実践した。その授業実践から明らかになった様々な成果や課題から、いま求められている「いのち」の学習の具体的な内容や取り組みについて構想し＜生と死から学ぶ「いのち」の学習モデルプラン＞を提案する。

１　求められる「いのち」の学習

学校教育における「いのち」の問題の取り組みは、現代の子どもの死生観を探ることが重要とされる。そこで1982年に「東京都立教育研究所」、2003年に「麻布台学校教育研究所」、2004年長崎・佐世保女児殺傷事件後「長崎県教育委員会」が実施した子どもの死生観を問う意識調査を手がかりに子どもの死生観の発達について考察した。これらの調査結果から現代の子どもの死が明確に把握されていない現状や「いのち」の有限性、仮想と現実の区別がつかなくなっている曖昧な死のとらえ方が明らかになった。現代の子どもは、死が無造作に氾濫する社会のなかで、曖昧な死とともに成長していると言える。現代の子どもの死のイメージや死の認識は、自らの経験によるものではなく周囲からの様々な情報の影響を受けていることも明らかになった。現代の子どもたちには、曖昧な子どもの死生観に注目し、学校や家庭、地域社会において、真正面から死と向き合う学習の場が必要とされる。求められる「いのち」の学習は、死からの隔離ではなくむしろ死を自然なプロセスとして受け止め、生きることの大切さに気付き、自らがよりよく生きる人間の生き方を探究する学習であると言える。

２　学校における「いのち」の学習

自他の「いのち」を簡単に損なうといった現象や子どもたちの歪んだ死生観は、日常生活から死が隔離され、死がタブー視されてきたことが要因の一つとして挙げられる。近年、わが国では、死をタブー視するのではなく、現代の子どもの死の意識に注目し、死を身近にとらえられる学習の取り組みが必要とされ、関心が高まってきている。しかし、死を直接取り上げて授業を実践している研究事例は数少ないと言える。数少ない事例の中で、死と向き合わせる授業としてもっとも大きな反響を及ぼした鳥山敏子の「自分のからだを通して学ぶ」実践と金森俊朗の「本物の生きる姿に触れる」実践を考察した。また、外国における死の教育はどのように取り組まれ子どもの死生観はどのようにはぐくまれているか、ドイツ、アメリカの学校教育における死の教育の取り組みについて事例を検討した。

「いのち」の問題は、日常の学校教育全体の場で考える必要があることは周知の通りである。それは、あらゆる教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間において関連性を図りながら取り組む必要があると言える。わが国の学校教育に求められている「いのち」の学習の取り組みは、多くの課題が山積している状態にあると言える。①学習の場の課題、②学習の内容の課題、③教師の課題、④学校、家庭、地域との連携における課題が考えられる。例えば、教師の課題としては、子どもと向き合う教師自身が子どもと共に授業を創るといった視点に立ち“教える授業”から“学び合う授業”へと感動を共有していく教授法の見直しや根本的な発想の転換が求められ必要とされている。小論では「いのち」の学習における学校の取り組みの現状や具体的な方法、学校の果たす役割、今後の課題について考察し論考を進めた。

３　「いのち」の学習の実際と授業モデルの提案

わが国では、「いのち」の問題の取り組みの歴史や伝統もなく、実践の積み重ねが乏しい現状がある。小論では、現代の子どもの死生観に注目し、「いのち」の学習の取り組みが小学校高学年の子どもにどのように受け止められるか実際の「いのち」の学習の授業場面を通して実証的に示した。授業は、実践前の子どものアンケート調査(児童数 23 名)から明らかになった 5 人の子どもの曖昧な死の意識に注目し、「生と死」に直面させる学習を構想し、「いのち」の学習全 21 時間の単元を総合的な学習の時間において実践した。実践からは、他者との関係性の中で自己肯定感をもてる学習プログラムの充実を図る必要性や様々な課題が明らかになった。そして授業実践を通して明らかとなった成果や課題から「いのち」の学習の具現化における指針を考察し、総合的な学習の時間において「生の学習 21 時間、死の学習 18 時間」からなる「いのち」の学習全 39 時間（学習課題の設定や課題の追究においては、子どもたち自身が課題を基にして主体的に取り組むことが望まれる。そこで学習課題の設定や追究の取り組みについては提案していないが必要性を指摘しておきたい）＜生と死から学ぶ「いのち」の学習モデルプラン＞を構想し提案する。(下記表を参照)

ここに提案する＜生と死から学ぶ「いのち」の学習モデルプラン＞は、「生と死」の意義を探究するものであり、子どもの発達に即して弾力的、創造的な活用が考えられる。そして、豊かな「いのち」の学習を展開し、子どもたちに「いのち」について学ぶ楽しさや限りある「いのち」を他者と共生しつつ生きていく喜びを感得して欲しいと願いを込め提案するモデルプランである。

提案＜生と死から学ぶ「いのち」の学習モデルプラン＞の内容				
生　の　学　習（全 21 時間）				
ステージ	ねらい	学習活動計画		時間
Ⅰ「いのち」のふしぎ	Ⅰ「いのち」のイメージをふくらます。 ○「いのち」についての価値観の多様性を知り、人それぞれ様々な考えがあることに気付くことができる。 ○一つの「いのち」は他の多くの「いのち」によって支えられていることを実感することができる。	Ⅰ−1	■＜「いのち」について考えよう＞ ◇「いのち」についてどんなイメージをもっているか話し合う。(2) ・ゲームをしながら人それぞれに多様な考えがあることに気付く。 ・友だちの考えをよく聞き、自分の考えを明確にし、はっきり伝える。 ◇人間の「いのち」のイメージをふくらます。(2) ・「いのち」から連想することを、ウェビング方式であらわしてみる。 ・「いのち」についてどんなイメージをもっているか話し合う。	(4)

		Ⅰ－2	■＜「いのち」を体感しよう＞◇動物とふれあう活動を通して「いのち」のぬくもりを体感する。・モルモット・ウサギ・ハムスターなどとふれあう。	(1)
Ⅱ「いのち」のはじまり	Ⅱ　「いのち」の尊さを考える。 ○人の「いのち」のはじまりから「いのち」の誕生までのおおよそを理解し、奇跡的な自分の「いのち」の誕生に気付くことができる。 ○自分はかけがえのない存在であることに気付くとともに自他の「いのち」の大切さを考えることができる。		■＜３億分の一の「いのち」から誕生までの過程を考えよう＞ ◇わたしはどのようにして誕生してきたのだろう。 ・「いのち」のはじまりから「いのち」の誕生までの過程を知る。 ・自分の「いのち」のはじまりをさかのぼって疑問や不安を出し合う。 ・生命の誕生について助産師さんから話を聞く。 ・胎児の成長の様子から、生命の神秘さを実感する。 ・精子と卵子の旅・へその緒・胎盤・羊水について学ぶ。(助産師さん・ビデオ視聴)	(2)
Ⅲ「いのち」の誕生	Ⅲ　大事にはぐくまれている「いのち」を実感する。 ○妊婦さんとの触れあいを通して、大事に育んでいる「いのち」のぬくもりを体感することができる。 ○子どもを大切に育てている母親の愛情や思いに直接触れ、自分も同じように愛されて成長してきたことを感じ取ることができる。		◇人間の赤ちゃんを抱かせてもらったり、妊婦さんと触れあったりしながら「いのち」のぬくもりを体感する。(2) ・赤ちゃん誕生について妊婦さんから話をしてもらったり、人間の赤ちゃんを抱かせてもらったりしながら大事にはぐくまれている「いのち」を実感する。 ・子どもを大切にはぐくんでいる母親の愛情や思いに直接触れ自分も同じように愛されて成長してきたことを感じ取る。(家庭での聞き取りや写真などから) ◇家族からの聞き取りや、母子手帳などから自分が誕生してきた様子を調べる。(保健所→母子手帳の発行の仕組みなどから) (2)	(4)
Ⅳ「いのち」のつながり	Ⅳ　「いのち」の素晴らしさ、自分の存在を実感する。 ○「いのち」は連綿と続いていることを理解するとともに、自分はたった一人の個性をもった人間であり、たくさんの人のおかげで生きていることを知ることができる。(自他の「いのち」の大切さを認識する)。 ○「いのち」は何千年の昔から大切に受け継がれてきたものであり、また、自分自身も「いのち」を未来に受け渡していく大切な立場であることに気付くことができる。	Ⅳ－1	■＜「いのち」のつながりを実感し「いのち」の大切さを知ろう＞(1) ◇自分の「いのち」は膨大な数の「いのち」とつながっていることを知る。 ・自分の「いのち」のつながりを考える。 ・家系図をつくりながら「いのち」の大切さを考える。 ・未来を支える人間の「いのち」を育てていることに気付く。	(2)
		Ⅳ－2	■＜「いのち」は支え合って存在することを知ろう＞(1) ◇未来の自分は日々の積み重ねの延長にあることに気付き、未来の自分につながっていることを知る。 ・家系図を作成したものをもとに話し合う。 ・「いのち」の素晴らしさ、自分の存在感を実感する。	
Ⅴ「いのち」のかがやき	Ⅴ　自分の生き方について考える。 ○かけがえのない「いのち」は、多くの人に支えられ支え合って存在することを理解し、未来の自分につながっていることに気付き、よりよい自分づくりに心がけようとすることができる。 ○「いのち」の素晴らしさを実感し、自分自身の存在の大きさに気付くことができる。 ○自分の生き方やものの考え方について深く考え、自己を振り返り、よりよく生きていこうとすることができる。 ○成長を振り返り、調べたことや体験したことをもとに自分史を作成することができる。	Ⅴ－1	■＜自分にとって一番大切なものはなにかを考えよう＞ ◇生きていることの素晴らしさを実感する。 ・自分にとって一番大切なものは何かを話し合いながら、「いのち」の尊さ、生きていることの素晴らしさを実感する。 ・ゲストティーチャーに現在の活動から自分の生きざまを語ってもらい生き方に触れる。	(2)
		Ⅴ－2	■＜自分の成長を振り返り自分史を作成しよう＞(未来の自分への贈り物) ◇生命の誕生を振り返り、自分史づくりの計画を立てる。(1) ◇自分史を作成し発表する。(構成や表現を工夫して作成する) (3)	(4)
		Ⅴ－3	■＜生の学習から自己を振り返り自分の生き方を考えよう＞ ◇生の学習を終えて自己を振り返り「いのち」の学習のまとめをする。	(2)

死　の　学　習　(全 18 時間)				
ステージ	ね　ら　い	学　習　活　動　計　画		時間
Ⅵ「いのち」の別れ	Ⅵ「いのち」のわかれを考え、「いのち」の尊さについて考えることができる。 ○自分の体験から死について考え死をイメー	Ⅵ－1	■＜「いのち」のわかれを考えよう＞ ◇死をイメージしながらウェビングで表し死について考える。	(1)

		Ⅵ－2	■＜身近な生き物（ペット等）の死を通して自分の体験から考えよう＞ ◇小動物の飼育体験から動物の死について考える。	(1)
		Ⅵ－3	■＜年老いた動物の「いのち」を考えよう＞ ◇どんな動物の「いのち」も人間の「いのち」も同様に尊いものであることを実感する。(2) ・動物飼育係の方や獣医さんから話を聞き「いのち」について考える。 ◇ブックトークの手法を用いて、本や写真を活用しながら考える。(1)	(3)
Ⅶ「いのち」のゴール	Ⅶ　人間の「いのち」のゴールを考える。 ○死のもつ意味を知り、自他の「いのち」の尊さを考えることができる。 ○人の死が残すものを考えながら、いまを生きる自分たちに大切なものは何かを考えることができる。	Ⅶ－1	■＜リセットできない人間の死について考えよう＞ ◇「生と死」のちがいについて考え、死は一回性のものであり、有限であることに気付く。 ・「生と死」のちがいを書き出しながら考えていく。	(1)
		Ⅶ－2	■＜「いのち」の連続性から、死のもつ意味を考えよう＞ ◇死の意味を考え、自分の生き方について話し合う。 ・動物のなかで人間だけのもつ才能に気付く。 ・他者の苦しみも痛みも自分のことのように感受することができる「思いやり」の心の大切さに気付く。	(1)
		Ⅶ－3	■＜死というゴールについて考えよう＞ ◇絵本『わすれられないおくりもの』から死について考える。(1) ・自然の小さな約束→生き物が生まれて死ぬ。 ・人間は心の持ち主→思い出として覚えていることができる。 ◇死というゴールがあるから懸命に生きていける。(2) ・葬儀屋さんから話を聞き人間の「いのち」のゴールについて考える。 ◇自分の「いのち」を輝かせる「いのち」のゴール。(1) ・人間の死やいまを生きる自分たちに大切なものは何かを考える。	(4)
Ⅷ自己を振り返る	Ⅷ　自分の生き方について考える。 ○自分の「いのち」について考え、生きることの素晴らしさを実感することができる。 ○かけがえのない「いのち」だからこそ、自分の生き方に目を向け考えることができる。	Ⅷ－1	■＜死を受け入れていくことから人間の「いのち」の価値を考えよう＞ ◇限りある大切な「いのち」だからこそ大切に生きよう。（取材から） ・人間の「いのち」にはその生とともに、与えられた生命力を養い育てていく責務がおかれていることに気付く。	(2)
		Ⅷ－2	■＜かけがえのない「いのち」、生きることの素晴らしさを実感しよう＞ ◇かかわりの中で「いのち」が生まれ、ゴールがあることを理解する。 ・ホスピスボランティアの方から仕事の内容や、「生と死」についての話を聞き、生きることの素晴らしさを実感する。	(2)
		Ⅷ－3	■＜死の学習から自己を振り返り、自分の生き方を考えよう＞ ◇家族からのメッセージを受け取り、大切にはぐくまれている「いのち」を感じ、感謝の気持ちをもつ。(1)　◇家族へ感謝の手紙を作成する。(1) ◇死の学習を終えて自己を振り返り「いのち」の学習のまとめをする。	(3)

Ⅱ学校等における研修成果の活用計画

学校内では、スクールカウンセラーをはじめ周りの教師も含む多くの人々との連携が必要とされる。そこで、「いのち」のネットワークを作成し、「いのち」に関する問題を収集し、発信していく活動が考えられる。また、学習の充実を図るために、地域の人材を活用する連携の工夫が必要とされる。具体的な取り組みについては、校内の研修計画の中にカリキュラム開発を位置付け、日常の実践において意識的に取り組む体制を作ることが求められる。「いのち」の学習カリキュラムの開発は子どもの発達段階に応じたカリキュラムの作成が課題とされる。

研究成果を広く公開し、研究成果の活用と共有を図る。「いのち」の学習コーディネーターの役割を果たし、人材の活用、素材の収集の方法など、適切な助言ができるようにする。また、新宿区教育研究会生活・総合部において研究成果を公開し積極的に研究成果を生かしていく。

大学院派遣研修成果活用状況

所　属　校	新宿区立花園小学校	氏　名	小澤惠智子
派遣大学院	鳴門教育大学大学院	専攻・ｺｰｽ	学校教育専攻・総合学習開発コース
研究主題	「いのち」の学習と構想　　―小学校高学年の場合―		

1　所属校での成果活用

大学院での研究を、小学校１年生における「いのち」の学習の取り組みとして、生活科・道徳・特別活動などで実践した。

○身近な生き物とふれあう機会の設定

○身近な動植物の飼育を通して（カブトムシの幼虫の飼育・金魚のお世話など)「いのち」の大切さや尊さについて学ぶ学習の取り組み。

・生き物を飼育し，それらが生命をもっていることや成長していることに気付くとともに，生き物の生命を大切にする態度を育てて行きたいと考えた。

・児童一人一人がカブト虫の幼虫の世話を通して（自分の幼虫に命名し，ペットボトルで飼育）①しっかりと自分が世話をしないと死んでしまうこと。②いのちを預かり世話をしていくことの責任と自覚。③ふん取りなどの世話を通して愛着がわき可愛くなる。など「いのち」に触れることで，いのちの不思議さ，尊さを学ぶことができている。また,「触ると温かいよ，ふにゃふにゃしてる」「うんちはここからしてるよ」「白い色から黄色く変わってきたよ」など詳しく観察することができ，優しい気持ちで接することができている。こうして，いのちを丸ごと感じる経験として有意義な学習であり，いのちの尊さに気付くことができる学習となっている。

○朝顔の種まきから種取りまで朝顔の成長を観察しながら「いのち」の循環について学ぶ学習の取り組み。・みつけたよカードから（観察カード）

> ◇ あさがおのたねからあさがおがさいて，すごいとおもいました。たねがまたでてきてくりかえしになるのがすごいとおもいました。
>
> ◇ あさがおをそだてていて，どうしてふたばがでるのかわかりました。なぜかというとたいようのひかりをとるためです。あさがおがくりかえしになっているのがおもしろいとおもいました。

○学級で飼っていた金魚の死を通して，死について学ぶ学習の取り組み。(死んだものは絶対に生き返らないことを学ぶ)

・命名した金魚の死を目の前にして,“死ぬってどういうことだろう”と，死について考える。実際，死んだ金魚を触って「かたいよ，つめたいよ」「どうなっちゃうの」「もうおよげないんだね」と色々な気付きが挙げられた。代わりの金魚は入れられても，死んだ金魚は生き返れないことを実感することができた。子どもたちにとっては，死を考える機会となり，自然に帰してあげることは，他のいのちをつなぐことになっていくことを知る学習となった。

○クラスの児童の祖父の死から，死について考え「いのち」あるものは必ず死ぬことや悲しみを抱えた友だちの気持ちを考え，いたわりの気持ちをもつことの大切さに気付くことができた。

2 委員会・研修会での成果活用	○日本生活科・総合的学習教育学会東京支部　発表(実施日：6月 5日) 「生と死から学ぶいのちの学習」－小学校高学年の場合－ ・実践授業の報告と「生と死から学ぶいのちの学習」のモデルプランの提案 ・成果と課題について協議 ・これからの重要なテーマであることが確認された。 ○生活科教育研究会　全国大会　発表(実施日：8月 17日) 「生と死から学ぶいのちの学習」－小学校高学年の場合－ ・実践授業の報告と「生と死から学ぶいのちの学習」のモデルプランの提案 ・成果と課題について協議 ・これからの重要なテーマであることが確認された。 ○生活科教育研究会誌『生活科の探究』に寄稿 ○新宿区教育委員会　男女共同参画啓発誌作成委員
3 成果を生かした研究授業等	○公開授業 校内研究　授業提案(実施日　9月 5日) ○学校一斉公開授業(実施日　6月 15日・16日・17日・9月 4日・5日・6日) ○道徳授業地区公開講座（実施日　12月 7日） ・主題名　「おかあさんのたからもの」　内容項目３－（２）生命尊重 ・本時のねらい　生きることを喜び，生命を大切にする心情を育てる。 ・主題設定の理由　(1)ねらいとする価値について 生命の大切さは，どれだけ強調してもしすぎることはない。すべての道徳性は，生命が大切にされて初めて成り立つものである。この生きているもの全ての生命に対する尊重の精神を得るため，特に低学年においては，自らが生きている証を実感し，そのことに喜びを見出すことによって，生命の大切さを自覚できるようにすることが大切であると考える。こうした心を育むことによって，自らの生命だけでなく他者の生命をも尊重する態度を育むことができると考えるからである。 ・母親からのメッセージを読み，自分は，とっても大切なお母さんの宝物であることを実感する。 ・友だちも友だちのお母さんにとってとても大切な宝物であることを知る。 ・子どもたちに見立てた柿の実を提示することによって，一人一人の存在の大切さと，そうした友だちによって，１年１組が存在することを視覚に訴え自分も学級の宝物だし，友だちも学級の宝物であることを知る。
4 今後の活用計画等	○新宿区教科等研修会　公開授業予定（生活科）（実施日　１９年１月２５日） 「お正月のあそびをたのしもう」 地域の敬老会の方々との交流を通して，敬老会の方々の優しさに気付き，友だちや自分の良さに気付く学習。 ○鳴門教育大学学会誌に発表予定 ○東京都小学校生活科・総合教育研究会　実践事例集に寄稿予定